

Otfried Preußler Ich bin ein Geschichtenerzähler

私は物語の語り手である

オトフリート・プロイスラー 著／森典子 訳

ズザンネ プロイスラー・ビッチュ／レギーネ シュテイクローアー 編

「最新刊」／四六判上製カバー装・二五六頁 定価（本体二、八〇〇円＋税）

『小さい水の精』『小さい魔女』『大どろぼうホツツェンプロッツ』『クラブート』等で知られるドイツの代表的児童文学作家が、生涯や創作活動とその背景・影響等について自ら述懐する。

オトフリート・プロイスラー 著 Otfried Preußler: *Ich bin ein Geschichtenerzähler* Hergyon Susanne Preußler-Birsch und Regine Sgöher, Thienemann Verlag (110110年) の全訳。プロイスラーの娘二人が編纂した、いわば彼の自叙伝であるといえる書である。

プロイスラー（一九三三～二〇一三）は、現チエコ共和国のリベレツという町で生まれ、当地で恵まれた幼年時代を送り高等学校卒業試験を済ませた直後、東部戦線に送られ、その後ソ連軍の捕虜となった。敗戦の日をタタール共和国のエラブガの収容所で迎えるが、戦後も過酷な収容所生活が四年間も続く。ドイツが無条件降伏をした一九四五年以降ズデーテン・ドイツ人が強制移動させられ、故郷を追われたプロイスラーを待っていたのは「故郷喪失」という現実であった。以後彼はローゼンハイムに移住し、小学校の教師をしながら児童文学作品を書き、物語の語り手プロイスラーが誕生する。代表作の多くは、一九五〇年代後半から七〇年代初頭までの、約十五年の間に書かれ、日本でもその著作の多くが翻訳された。

彼自らの体験を通じて本書で、戦争の悲惨さ、残酷さが強調されているが、そうした中でも決して失われることのない人間の尊厳も印象深く語られている。そして彼がとりわけ強調してやまないのは、失われた幼年時代の復権、幼年時代におけるファンタジーの育成の大切さである。プロイスラーの述懐の自伝的内容を集約した本書は、その意味で、あまりに即物的となった時代に対する警告に充ちているともいえる。

【本書の内容】

本書成立の由来、編者まえがき

第一章 「素晴らしく晴れやかな日々」——ライヘンベルクの幼年時代

第二章 「人間は、物語を必要としている」——戦争、捕虜、再出発

第三章 「物語の語り手として学校へ行った」——二つの職業、教師と作家

第四章 「思考の遊びへのきっかけ」——子供たちは物語を必要としている

第五章 「物語のためのパン焼き人、なかなか良い呼び名です」——仕事場瞥見

第六章 「私は、生涯において多くの幸せに恵まれました」

——プロイスラーの作中人物が遍歴の旅に出る

第七章 終わりに若干の言葉



キリトリ線

注文書	
地方小出版	流通センター 取扱品
帖合・書店名	
注文数	冊
条件	注文
ISBN978-4-903251-24-0 C0098	鷗出版 オトフリート・プロイスラー 著 森典子 訳 私は物語の語り手である
定価(本体2,800円+税)	
ご注文日	
年	月 日

仕入れご担当者様 ※ご注文は(株)地方・小出版流通センターへ FAX: 03-3235-6182



鷗出版

〒270-0014 千葉県松戸市小金 447-1-102

電話: 047-340-2745 / ホームページ: <https://www.kamome-shuppan.co.jp>

